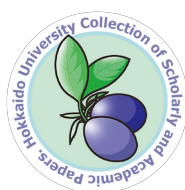




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「地域」はいかに構築されうるか：チェコ、ポーランド、ドイツ境界「ベスキーデンラント」の事例から
Author(s)	森下, 嘉之
Citation	境界研究, 4, 31-52
Issue Date	2013-11-29
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.4.31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61180
Type	departmental bulletin paper
File Information	03Morishita.pdf, 本文



「地域」はいかに構築されうるか

——チェコ、ポーランド、ドイツ境界「ベスキーデンラント」の事例から——

森 下 嘉 之

序論

本稿は、第二次世界大戦後にチェコスロヴァキア・ポーランドの境界地域から追放されたドイツ系住民が提唱した「ベスキーデン地方(Beskidenland)」と呼ばれる地域概念が、どのように形成され、被追放民にとってどのような意味を有していたのかを問う。

本稿で扱う、「ベスキーデン地方」と呼ばれる地域について簡単に述べておく。同地方の由来となったベスキーデン山脈(ベスキディ)は、ポーランドとスロヴァキアの国境を横断するカルパチア山地の西端に位置する。大きくはチェコ側の西部ベスキート、ポーランド側の東部に分けられる。本稿が対象とする西部では、チェコとスロヴァキアの境界に位置するリサー・ホラ(Lysá hora/ Łysa Góra/ Lysa-Berg/ Gigula 標高1,325m)、ピルスコ(Pilsko 標高1,557m)、バビャ・グラ(Babia Góra 標高1,725m)など、標高1,500メートル前後の山が連なる場所として知られる⁽¹⁾。同山地は、チェコ東部では唯一の山地であり、現在でも観光名所として名高い。

この地はまた、第一次世界大戦以降に独立したチェコスロヴァキア及びポーランドと、大戦で領土を失ったドイツとの国境が近接する地域でもある。この地域は、1920年の二国間協定によってチェコスロヴァキアとポーランドに分割されたことで、戦間期には領土紛争地域として国際的に注目を浴びた。この協定によって分割されたチェシン(チェスキー・チェシン)市域(Cieszyn/ Český Těšín)の存在から、同地域の問題は一般的に「チェシン問題」として呼び表されることが多い。このような背景から、「チェシン地域」が取り上げられる際には、チェコスロヴァキアとポーランドの二国関係が暗黙の前提とされてきた。

これに対して、第二次世界大戦後に追放されたドイツ系住民が用いた地域概念が、前述した「ベスキーデン地方(ベスキーデンラント)」という呼称である。ベスキーデン山脈は広範な領域を指すが、本稿で用いる「ベスキーデン地方」は、チェコとポーランドの境界領域に限定される⁽²⁾。この「ベスキーデン地方」は領域的には上述の二国間分割地域、すなわち

(1) Anton Gruda, *Heimat zwischen Oder- und Weichselquellen: Die Beskiden und ihre Nachbarn in Wort und Bild* (Inning am Ammersee: Gödel, 1955), pp. 16, 40.

(2) ポーランド側からは「シロンスク・ベスキート(Beskid Śląski)」、チェコ側からは「スレスケー・ベスキディ(Slezské Beskydy)」と呼ばれる地域を指す。

「チェシン地域」とほぼ共通するが、チェコ領オストラヴァやフリーデクなど、「チェシン地域」以外のドイツ人居住地域を含んでいる。すなわち、「ベスキーデン地方」とは、実体的な地理的概念というよりもむしろ、この地域に点在するドイツ人の居住地という表象的な概念であったと考えられる。このことから、「ベスキーデン地方(ベスキーデンラント)」が、ヒトラー政権に併合された「ズデーテンラント (Sudetenland)」のアナロジーであることは容易に想像できよう⁽³⁾。ともに、現在のチェコ共和国の国境地帯から追放されたドイツ系住民が提唱した地域概念であり、「ズデーテンラント」もまた、現在のチェコとポーランドの国境に広がるズデーテン山地に由来している。

この地域は、「チェシン問題」に伴う領土紛争が生じた歴史的背景から、領土問題の当事国であるチェコスロヴァキア及びポーランドの両国で数多くの研究が積み重ねられてきた⁽⁴⁾。また、同地域が、歴史的にシレジアの一部であったことから、ドイツ・シレジア研究の一環としても位置づけられてきた。隣接する上シュレージェン／上シロンスク (Oberschlesien/ Górny Śląsk) は、ポーランド人とドイツ人が混在する境界地域であり、第一次世界大戦後の住民投票によってポーランドとドイツに分割された⁽⁵⁾。これに対して、「チェシン地域」は、第一次世界大戦後に二国に分割されたという点では上シュレージェンと共通しているが、住民投票を経ずに分割された点が異なる。さらに当地は、カトリックが圧倒的多数派である隣接地域に比して、例外的にプロテスタント(ルター派)が一定の比率を占める地域としても知られており、ドイツ系住民はその重要な構成要員でもあった。このように、ドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキアの歴史的な境界地域であること、社会的多様性への着目から、言語学、民俗学、教会史など多様な分野で研究が積み重ねられてきたことが特徴である⁽⁶⁾。

地域史研究の蓄積の一方で、境界地域としての歴史的背景から、「ベスキーデン地方」の歴史は、ドイツ、チェコ、ポーランドいずれの「国民史」からも抜け落ちる存在であった。

- (3) 「ズデーテンラント」は、第二次世界大戦時に併合された北・西ボヘミア地方が狭義では当てはまるが、後述するように、チェコ領内出身のドイツ語住民が象徴的に「ズデーテン・ドイツ人」として呼び表された。Eva Hahnová, *Sudetoněmecký problem: Obtížné loučení s minulostí* (Ústí nad Labem: Albis International, 1999), p. 62.
- (4) 「チェシン問題」については厚い研究蓄積が存在するが、さしあたって、以下の研究を参照。Otakar Káňa and Ryszard Pavelka, *Těšínsko v polsko-československých vztazích 1918-1939* (Ostrava: Profil, 1970); Dan Gawrecki, *Politické a národnostní poměry v Těšínském Slezsku 1918-1938* (Český Těšín: Museum Těšínska, 1999); Marie Gawrecká, *Československé Slezsko mezi světovými válkami 1918-1938* (Opava: Slezská Univerzita, 2004).
- (5) James E. Bjork, *Neither German nor Pole: Catholicism and National Indifference in a Central European Borderland* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2008); 伊藤定良「国民国家と地域形成：オーバーシュレージェンを中心に」伊藤定良、平田雅博編『近代ヨーロッパを読み解く：帝国・国民国家・地域』ミネルヴァ書房、2008年、255-288頁。
- (6) 当地は言語社会学的にも着目される地域であるが、その理由はスラヴ系地元住民がポーランド人でもチェコ人でもない「シレジア人(Ślązacy/ Schlesier)」として研究されてきたためである。「シレジア人」については、さしあたって下記の研究を参照。Ladislav Pallas, *Jazyková otázka a podmínky vytváření národního vědomí ve Slezsku* (Ostrava: Profil, 1970); Tomasz Kamusella, *Silesia and Central European Nationalisms: The Emergence of National and Ethnic Groups in Prussian Silesia and Austrian Silesia* (West Lafayette: Purdue University Press, 2007).

近年では日本でも東欧からドイツへの被追放民に関する研究が進展しているが、東欧各国からの被追放民は一律に追放ドイツ人(チェコスロヴァキア出身の場合は「ズデーテン・ドイツ人」として論じられることが多く、その実態を考察した研究はいまだ数少ない状態にある⁽⁷⁾。以上の点から、本稿は、第二次世界大戦後も故郷に残ったチェコ人やポーランド人と異なり、大戦後に故郷から「追放／移送」されたドイツ系住民が提唱した「ベスキーデン地方」という地域概念に着目する。この地域概念の形成過程を検討することで、境界地域がどのように設定され、政治化していくのか、その一端を明らかにすることが目的である。

以上の課題を踏まえて、本稿では、第二次世界大戦後に追放された「ベスキーデン地方」出身のドイツ人が設立した故郷団体「ベスキーデンラント (Heimatbund Beskidenland)」の地域・歴史観を、機関誌『ベスキーデン・ポスト (Beskiden Post)』『ベスキーデン・カレンダー (Beskiden Kalender)』『我がベスキーデン地方 (Mein Beskidenland)』及び同時代文献から考察する。これらの史料を通して、主に第二次世界大戦後から1960年代までの時期を中心に、「ベスキーデン地方」という概念がどのように形成され、どのような意味を有したのかを問い直したい。

なお、本稿で扱う、チェコ、ポーランド、ドイツ境界地域は、現在ではチェシン地方 (Cieszyn/ Těšinsko) と呼ばれることが多い。ただし、この名称はチェコとポーランドの歴史的な領土問題を背景としているため、基本的にはこの両国の歴史観を反映した地域名称と言える。本稿では混乱を避けるために、「ベスキーデンラント」という名称はドイツ人故郷団体の方を指すこととし、当該のドイツ人たちが居住していた同地域は、故郷団体の叙述に従って「ベスキーデン地方」とひとまず呼ぶことにする。なお、地名に関しては基本的には現在の表記、チェコ領ではチェコ語表記、ポーランド領ではポーランド語表記で記述するが、ハプスブルク帝国期などではドイツ語表記も適宜併記する。

1. 「ベスキーデン地方」の地域概念：戦間期の歴史認識との関連

1.1 ドイツ系住民の地域認識

本章ではまず、「ベスキーデン地方」と称される地域が、歴史的にどのような地域概念を

(7) チェコスロヴァキア(当時)におけるドイツ人追放と、第二次世界大戦後のドイツ連邦共和国での被追放民政政策については厚い研究蓄積があるが、邦語ではさしあたって、以下を参照。矢田部順二『「チェコ＝ドイツ和解宣言」の調印に見る戦後の清算：ズデーテン・ドイツ人の「追放」をめぐる』『修道法学』20巻1号、1998年、119-155頁；川喜田敦子「東西ドイツにおける被追放民の統合」『現代史研究』47号、2001年、1-16頁；佐藤成基『ナショナル・アイデンティティと領土：戦後ドイツの東方国境をめぐる論争』新曜社、2008年。この地域の研究に最も力を注いでいるのは、チェコ領域内に今も自民族のマイノリティを抱えるポーランドである。ポーランド側の研究は、この地の社会経済史研究に大きく寄与したが、現代の「ポーランド人マイノリティ」を研究の出発点に、その起源を遡るという民族史観が根強く残っている。例えば、Karol Daniel Kadłubiec, ed., *Polska narodni menšina na Těšinsku v České republice (1920-1995)* (Ostrava: Ostravská Univerzita, 1997); Roman Kaszper and Bohdan Małysz, eds., *Poláci na Těšinsku: studijní materiál* (Český Těšín: Kongres Poláků v České republice, 2009)。

有し、その呼称が誰によって、どのような意図を持って用いられていたのかを整理しておきたい。この地域は、各国民集団によって様々な呼称を持っているため、地域認識は常に重要な研究テーマであり続けた。ここでは、ルフト (Robert Luft) による近年の先行研究の整理に基づいて確認することにした⁽⁸⁾。

歴史的には、同地域は1290年から1653年まで、チェシン公国(Herzogtum Teschen)と呼ばれる政体であった。同地は、後にハプスブルク領シレジア公国の一部を形成したが、1742年の対プロイセン戦争で敗れたことで、オーストリアはシレジア地方の大部分を失った。このときにオーストリア領として残った地域は、オーストリア・シレジア領邦となり、19世紀には領邦議会が置かれるなど、ボヘミアやモラヴィアと同様に、「帝国議会に代表を送る諸邦」の一員として、ハプスブルク帝国の西半分(いわゆるオーストリア側)を構成した。行政的にはシレジアが公式名称として用いられ、中世以来のチェシン公国を通して、シレジアの一部という認識が涵養された。チェシン公国は、チェシン(Cieszyn/ Teschen)、フリーシュタート(Frýštát/ Freistadt)、ビーリッツ(Bielitz)の三郡庁(Bezirkshauptmannschaft) (後に、フリーデク郡(Frýdek)がフリーシュタート郡から分離し、四郡庁)へと再編され、オーストリア・シレジア邦の東半分を構成した⁽⁹⁾。

この四郡庁は、第二次世界大戦後にドイツ人側が掲げた「ベスキーデン地方」と、大まかな範囲で重なっていた。現チェコ領のオストラヴァとその近郊のカルヴィナー (Karviná) は、19世紀後半に本格化した鉱山採掘を背景に、帝国屈指の工業地域へと発展したことで、近隣地域から数多くのチェコ語住民、ポーランド語住民が流入した。当地域の中心都市であったチェシンやビーリッツは織物工業が栄え、ドイツ語住民が多い地域であったが、ガリツィアとの境界に位置するビーリッツには、ポーランド人、さらにユダヤ人も流入した(表1、2参照)。このように、19世紀末の帝国の近代化に伴う「国民化」⁽¹⁰⁾によって、ベスキーデン地方では、多言語・多宗派の社会、換言すれば、複数の国民社会が併存する形となっていた。

帝政末期から戦間期にかけて、当地のドイツ系住民の間でおそらく最も使われた地域概念は、「東シレジア(Ostschlesien)」であった。この概念は、オーストリア・シレジア領邦を、オパヴァ(Opava/ Troppau)を中心とする西部シレジアと、チェシンを中心とする東部シレジアに分ける考え方であり、ドイツ系住民だけでなくチェコ系住民によっても用いら

(8) Robert Luft, “Das Teschener Schlesien als nationale und regionale Geschichtslandschaft: Tschechische, polnische, deutschsprachige und schlesische Perspektiven der Geschichtswissenschaft im 20. Jahrhundert,” in Ludger Udolph and Christian Prunitsch, eds., *Teschen: Eine geteilte Stadt im 20. Jahrhundert* (Dresden: Thelem, 2009), pp. 11-41. ただし、本稿で扱う第二次世界大戦後の「ベスキーデン地方」については言及していない。

(9) *Ibid.*, pp. 11-18; Josef Joachim Menzel, ed., *Geschichte Schlesiens*, vol. 3: *Preußisch-Schlesien 1740-1945; Österreichisch-Schlesien 1740-1918/ 45* (Stuttgart: Jan Thorbecke, 1999), pp. 511-533.

(10) 「国民化」概念については下記を参照。なお本稿では、民族団体など他者との相違を明確にする場合において「民族」という語も用いる。福田宏『身体の国民化：多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会、2006年。

表1 ビーリッツ=ビアラ(ビェルスコ=ビャワ)のドイツ語住民比率(人数・%) (1880-1921 年)

年	1880	1910	1921
ビーリッツ	10,778 (86.6)	15,144 (84.3)	12,247 (61.9)
同近郊	7,947 (81.6)	11,573 (83.6)	9,728 (71.0)
ビアラ	5,084 (77.5)	5,750 (69.2)	2,134 (25.5)
同近郊	13,220 (81.1)	12,789 (54.5)	6,734 (31.3)
合計	31,945 (83.0)	39,505 (71.5)	28,709 (52.2)

出典：Walter Kuhn, *Geschichte der deutschen Sprachinsel Bielitz Schlesien* (Würzburg: Holzner, 1981), p. 335.

注：1921年は民族意識(自己申告)による統計。

表2 「チェシン地域」の住民統計：上・日常語(1900年)、下・民族(1921年)

裁判所管区	チェコ語	ドイツ語	ポーランド語	ユダヤ	その他	外国人
ボフミーン	3,342	4,943	19,179	—	94	1,669
	26,291	7,840	4,977	616	616	6,411
フリーデク	39,112	971	1,639	—	3	256
	40,051	477	348	45	12	1,392
フリーシュタート	6,436	3,235	45,599	—	162	1,527
	38,406	4,355	28,512	621	41	11,962
ヤブルンコフ	85	754	22,861	—	8	493
	5,444	769	18,950	58	23	1,448
オドリ	46	9,858	7	—	0	88
	392	8,595	6	0	4	239
オパヴァ	30,147	6,466	563	—	18	1,295
	33,632	5,087	57	30	25	1,703
シレジア・オストラヴァ	25,838	2,955	12,114	—	1	924
	41,787	2,276	877	368	23	8,712
チェスキー・チェシーン	4,333	4,592	27,796	—	1	989
	18,097	5,251	14,871	804	113	6,452
フリーデク市	4,981	3,362	543	—	0	151
	7,232	1,992	101	203	4	539
オパヴァ市	2,604	22,113	598	—	51	1,382
	8,527	22,008	139	608	150	2,025

出典：Zemský statist. úřad pro Slezsko, *Obyvatelstvo Slezska a Hlučinska v několika důležitých směrech na základě sčítání lidu ze dne 15. února 1921 se zvláštním ohledem na předešlá sčítání lidu* (Opava, 1924)より作成。

注：ユダヤ民族統計は1921年に調査開始。

れていた概念であった⁽¹¹⁾。ドイツ系、スラヴ系にかかわらず、同地域の住民にとって、シレジアという地域概念は重要な意味を持っていた。「東シレジア」は、狭義にはオーストリア・シレジア邦の東部を意味したが、ドイツ系住民にとっては、プロイセン領シレジアを念頭に置いての、最東端の地域として「東シレジア」は位置づけられていた。そうした地域認識が現れたのが、ウィーンの同地域出身者による学生団体「故郷団体・東シレジア人(Heimatgruppe Ostschlesier)」の設立(1879年)であった。同団体は、当時帝国内で勃興していた、ドイツ学校協会やノルドマルク(Nordmark)などのドイツ系民族団体と協力関係を構築し、「東シレジア」全域からドイツ人学生を呼び込んだ。戦間期に同団体は、チェコ国内で最大のドイツ人組織であったズデーテン・ドイツ人故郷連盟(Sudetendeutsche Heimatverband)の支部へと再編され、東シレジアにおけるドイツ国民運動の担い手となった⁽¹²⁾。

第一次世界大戦後、チェコスロヴァキアとポーランドに分割された同地域の領土対立は、「チェシン問題(Teschener Frage)」として国際的に認識されるようになる。この問題を対外的に訴え、戦略的に活用したのは内外のドイツ系民族団体であった。ブレスラウ(ヴロツワフ)の『シレジア年鑑(Schlesisches Jahrbuch)』誌上で1929年に掲載されたラムチュ(Paul Lamatsch=Teschen)の「チェシン回廊」、及び、ベルリンのヴィット(Kurt Witt)が1935年に著した『チェシン問題』は、ドイツ系ナショナリストによる当時の地域認識を体系化する試みであった。これらの文献においては、河川や鉄道網が交差するチェシンはダンツィヒ(グダンスク)と並ぶ戦略上重要な「回廊」であり、ハンガリーと接するドイツ文化圏の東南端として位置づけられた⁽¹³⁾。当地におけるドイツ人の利害を正当化するために、中世のドイツ東方植民運動によってドイツの法制度や農業・産業、文化が伝承されたことで、現地のスラヴ人社会がドイツ化したという歴史観が示されていた。さらに、19世紀後半の工業化によって、当地は帝国屈指の工業地帯へと発展するが、工業化はドイツ人によって担われたこと、劇場や教育機関などの社会施設もドイツ人の手によって整備されたことが強調された。工業化の展開によってスラヴ人労働者が流入し、ドイツ人社会の地位が脅かされる一方で、当地の政治・経済はドイツ人の指導下にあることが自明視されたのである⁽¹⁴⁾。

(11) Luft, “Das Teschener Schlesien” (前注8参照), pp. 32-33. オーストリア・シレジア邦内の東部シレジアと西部シレジアは、モラヴィア領オストラヴァによって、地理的には分断されている。

(12) 同団体は1938年に活動を終了した。Beskiden Kalender 5 (1959), pp. 98-99. 帝政期ウィーンにおけるシレジア出身ドイツ系学生による結社活動については、以下の文献を参照。Martin Pelc, “Studenti z Rakouského Slezska na vídeňských vysokých školách 1860-1914 a jejich organizace,” in Zdeněk Jirásek, ed., *Slezsko v 19. století* (Opava: Slezská Univerzita, 2011), pp. 87-111.

(13) 具体的には、ウィーン及びプラハからオストラヴァ、ボフミーンを經由して、ワルシャワやクラクフに向かう路線、ベルリンからブレスラウ、ボフミーン、チェシンを經由してハンガリー方面に向かう路線が交差する地域として重視された。Paul Lamatsch=Teschen, “Der ‘Teschener Korridor’,” *Schlesisches Jahrbuch* 2 (1929/30), pp. 123-127; Kurt Witt, *Die Teschener Frage* (Berlin: Volkund Reich Verlag, 1935), p. 28.

(14) Georg Kuruš, *Das Teschener Schlesien deutsch! Bielitzer Volksinsel und Schlonsakentum* (Berlin, 1939), p. 17.

こうした地域認識の背景として、ポーランドなど東欧諸国の歴史・文化・風俗などを研究することによって、中世のドイツ植民以来、同地域がドイツの文化圏にあることを実証しようとする「東方研究(Ostforschung)」の存在を指摘しなければならない⁽¹⁵⁾。第一次世界大戦によるドイツ東部領土の喪失を受けて、ベルリンやケーニヒスベルク(カリーニングラード)、ブレスラウなどドイツ東部の大学機関で、オバン(Hermann Aubin)やシーダー(Theodor Sieder)らによって「東方研究」⁽¹⁶⁾が確立された。1930年代にはチェコスロヴァキア国内でもドイツ研究を行う研究機関が開設され、ドイツ人の勢力圏の拡大を「学問的」に位置づける研究が進められた⁽¹⁷⁾。チェコ領内のドイツ系住民が第一次世界大戦後に、チェコスロヴァキアからの分離とドイツへの統合を目指したことに表れているように、帝政期以来のドイツ系住民の「大ドイツ」志向は、ズデーテン・ドイツ人党の台頭(1933年)を準備するものであった⁽¹⁸⁾。この時期の「東方研究」によって形成された歴史観は、第二次世界大戦後に設立される「ズデーテン・ドイツ人郷人会」(後述)にも引き継がれることになる⁽¹⁹⁾。

チェシン地域は、ドイツ系団体からも「テシェン地域(Teschener Land)」、あるいは国境となったオルザ／オルシェ(Olza/ Olše)川から「オルザラント(Olsaland)」と呼称され、国内外のドイツ人ナショナリストの見解を反映した地域認識が全面に打ち出されるようになった。ウィーンの「故郷団体・東シレジア人」もまた、1930年代に入ると機関誌『東シレジア人(Der Ostschlesier)』を通して、チェシン地域のドイツ性を主張した。この時期には、ビーリッツやオストラヴァ、チェシンなど個々の都市で多彩なドイツ系新聞が発行されていたが、「ベスキート」を冠する媒体は、1930年代に発行された『ドイツ人ベスキート新聞(Deutsche Beskiden Zeitung)』に限られていた⁽²⁰⁾。戦間期チェコスロヴァキアのドイツ系住民の間では、「東シレジア」地域に関する多様な地域概念が併存していたが、1930年代後半には、各紙でズデーテン・ドイツ人党との協同が推進されていった⁽²¹⁾。

(15) 第二次世界大戦前・後ドイツにおける「東方研究」の歴史に関しては、以下を参照。千葉敏之「閉じられた辺境：中世東方植民史研究の歴史と現在」『現代史研究』49号、2003年、1-23頁；谷喬夫『ナチ・イデオロギーの系譜：ヒトラー東方帝国の起原』新評論、2012年、85-91頁。

(16) オバンはブレスラウ大学において「folk史学」を体系化した、東方研究の第一人者的存在であった。シーダーはケーニヒスベルクでドイツ人東方研究に従事し、第二次世界大戦後はドイツ近世史研究の重鎮として知られるが、ナチ党員であった過去が度々指摘される。P. シェットラー著、木谷勤、小野清美、芝健介訳『ナチズムと歴史家たち』名古屋大学出版会、2001年。

(17) 例えば、以下の研究を参照。Ingo Haar, “‘Sudetendeutsche’ Bevölkerungsfragen zwischen Minderheitenkampf und Münchener Abkommen: zur Nationalisierung und Radikalisierung deutscher Wissenschaftsmilieus in der Tschechoslowakischen Republik 1919-1938,” *Historical Social Research* 31, no. 4 (2006), pp. 236-262.

(18) Tobias Weger, “Zwischen alldutschen Phantasien und sudetendeutschen Anschlussplänen: die gesamtschlesische Idee der 1920er und 1930er Jahren,” in Marek Adamski und Wojciech Kunicki, eds., *Schlesien als literarische Provinz: Literatur zwischen Regionalismus und Universalismus* (Leipzig: Leipziger Universitätsverlag, 2008), pp. 91-102.

(19) 篠原琢「中央ヨーロッパの歴史とは何か：異端派サークルにおける現代史論争」高橋秀寿、西成彦編『東欧の20世紀』人文書院、2006年、306-307頁。

(20) *Mein Beskidenland* 32, no. 4 (1989), pp. 4-5.

(21) 選挙における地元「シレジア人」との協同が指摘される。Josef Kozdon, “Aus der jüngsten Geschichte des Teschner Landes,” *Schlesisches Jahrbuch* 12 (1940), pp. 161-172.

このように、帝政期から戦間期にかけては、中央ヨーロッパ全体のドイツ国民運動と連動する形で、シレジアという地域概念を軸に、大ドイツを念頭に置いた地域認識が形成されていた。もっとも、このような地域認識は、オーストリア・シレジア東部において涵養されたというよりもむしろ、帝都ウィーンやプラハなど、当該地域から離れた都市におけるドイツ系国民団体やアカデミズムの場において理論化された。

1.2 スラヴ系住民にとっての「チェシン・シレジア」

前節で見たようなドイツ人の地域概念に対して、オーストリア・シレジア東部のチェコ系・ポーランド系住民は、同地が歴史的にシレジアに属するという点を前提としつつ、その由来となったチェシン公国、及びその中心都市チェシンに軸を据えて、同地を「チェシン・シレジア (Śląsk Cieszyński/ Těšínské Slezsko : 以下、チェシン地域とする)」と呼び表していた(図1参照)。

1918年のハプスブルク帝国崩壊とチェコスロヴァキア並びにポーランド両国の独立、その結果としての1920年の「チェシン地域」の分割は、現地住民の地域認識にも大きな影響を与えた。チェコスロヴァキア・ポーランド両国間で未解決であった同地域の帰属について、当初は上シュレージェンと同様に、住民投票が予定されていた。しかし、1920年7月に締結されたチェコスロヴァキア・ポーランドの大使間協定において、同地中央部を流れるオルザ川を国境として、「チェシン地域」はチェコスロヴァキアとポーランドに分割されることになった。特に、オルザ川をまたぐ位置にあったチェシン市は、ポーランド側のチェシン市(Cieszyn)とチェコ側に新設されたチェスキー・チェシーン市(Český Těšín)として隔てられた。分割された「チェシン地域」は、チェコスロヴァキア側はオーストリア・シレジア邦を継承したシレジア州(Země Slezská)、ポーランド側はシロンスク県(Województwo Śląskie)の一部へと編入された。1938年のミュンヘン協定では、ポーランドによって全域が占領された後、ドイツによる併合を経て、1945年には再びミュンヘン協定以前の国境に戻された後、現在まで続く国境となっている。

このように、戦間期チェコスロヴァキアにおいて公式には、「チェシン地域」は単一の行政組織としては存在しなかった。しかし、同地域を構成するチェスキー・チェシーン郡及びフリーデク郡、フリーシュタート郡には、ポーランド人マイノリティが多く残されたことに加えて(表2参照)、「チェシン地域」の重工業地帯がチェコ側に集中しており、同地域を結んでスロヴァキア側に至る鉄道路線もチェコ側に敷かれていた。このことは、ポーランド側からの領土修正要求を引き起こした。加えて、ポーランド・ウクライナ戦争やポーランド・ソヴィエト戦争に伴い、多くのポーランド(ガリツィア)出身の難民がチェシンのチェコスロヴァキア側に流入した。彼ら流入民は、チェコスロヴァキア側の統計では外国人として扱われたため、チェコスロヴァキア国内のポーランド人指導者は、チェコスロヴ



図1 「チェシン地域」「ベスキーデン地方」地図

アキアの統計においてポーランド人が少なく数えられていると批判していた⁽²²⁾。内外のポーランド系政治団体は、オルザ川国境の反対側に取り残された「チェシン地域」を「ザオルジェ (Zaolzie)」と呼称し、マイノリティ保護や失地回復運動を展開した。チェコスロヴァキア側においても、ポーランド人マイノリティ問題が顕在化した上述三郡は「チェシンスコ (Těšínsko)」と呼称された。しかし、チェコスロヴァキア政府は同地域を単一の行政単位としては認めず、1928年の行政再編によってシレジア州をモラヴィア・シレジア州 (Země Moravskoslezská) に編入することで、「チェシン地域」の領土修正要求に対する布石を打った⁽²³⁾。

オーストリア・シレジア東部地域は「チェシン地域」として、ドイツ系、スラヴ系の双方から認識されることになった。このように、「チェシン」または「東シレジア」という呼称は、主にドイツ系住民とスラヴ系住民の間で、さらには地元住民と地元から離れたドイツ系団体によって、特定の意図をもって用いられた。

(22) Káňa and Pavelka, *Těšínsko v polsko-československých vztazích* (前注4参照), pp. 14-16.

(23) シレジアのドイツ系議員及び親ドイツ派の「シレジア人」議員らは、チェコ系が多数派を占めるモラヴィアとの州統合はドイツ系議員の影響力削減を狙った政策であると批判した。Josef Kozdon, *Das Recht unserer schlesischen Heimat auf die verwaltungsmäßige Selbständigkeit: zur Widerlegung der angeblichen Gründe für die Angliederung Schlesiens an Mähren* (Troppau, 1927), p. 23.

2. ドイツ人追放と故郷団体「ベスキーデンラント」の設立

2.1 ドイツ系住民の追放政策

1945年5月のドイツ降伏に伴って、チェコスロヴァキアではドイツ系住民の追放が本格化した。この結果、第二次世界大戦後数年の間に、300万人近いドイツ系住民が、チェコスロヴァキアから追放された。こうした被追放民の多くは、連合国の占領下にあった東西ドイツ及びオーストリアに送られたが、中でも集中的に彼らが移送された地域が、ドイツ連邦共和国のバイエルン州であった。バイエルンにはチェコスロヴァキアのみならず、東欧全土からドイツ人が移送され、1946-1947年の間にバイエルンに流入したドイツ人は190万人にのぼった。中でもチェコ(ボヘミア、モラヴィア、シレジア)出身者の占める比率は高く、1950年の統計によれば、バイエルンに移送された193万人のドイツ人被追放民のうち102万人、53%がチェコ出身者であった⁽²⁴⁾。チェコ出身の被追放民は、連邦共和国政府の政策を受けて、1950年に自らの故郷団体「ズデーテン・ドイツ人郷人会 (Sudetendeutsche Landsmannschaft: 以下、郷人会)」を設立した⁽²⁵⁾。同団体は以降、第二次世界大戦後の補償問題をめぐって、政治的にも大きな影響力を果たしていくことになる。

このような故郷団体は、旧ドイツ領及び東欧諸国からの被追放民によって数多く設立されたが、郷人会をはじめとするチェコ出身ドイツ人の組織化は際立っていた。この背景には、第二次世界大戦前にドイツ国籍を保有していたドイツ東部領出身者と異なり、郷人会に集ったドイツ人は「チェコスロヴァキア共和国のドイツ人」すなわち外国出身者として扱われていたことが関係している。こうした状況は、チェコ出身者の郷人会への参加を促し、彼らのドイツ本国社会への統合が遅れることにつながった⁽²⁶⁾。

しかし、300万人近くに及んだチェコ出身ドイツ人は、当然のことながら決して一枚岩の存在ではなかった。第二次世界大戦後にチェコ側から追放されたドイツ人は、その多くがドイツやオーストリアとの国境沿いの地域、すなわち、1938年にドイツによって割譲された地域の住民であった。しかし、プラハやブルノといった大都市、さらには「言語島」と呼ばれる、国境地域ではないがドイツ系住民の比率が高い都市からも多くのドイツ人が追放されたため、彼らの社会背景は大きく異なっていた。第二次世界大戦前、チェコスロヴァキアのドイツ系住民は政治的にもキリスト教社会党、社会民主党、ドイツナショナルに分かれており、こうした政治潮流はズデーテン・ドイツ人党への統合を経たのちにも引き継がれていた。

郷人会はこうした分裂を克服するために、チェコ出身者のみならず、その家族や、さら

(24) Ernst Nittner, ed., *Dokumente zur sudetendeutschen Frage 1916-1967* (München: Ackemaun-Gemeinde, 1967), p. 377.

(25) Tobias Weger, "Die Volksgruppe im Exil? Sudetendeutsche Politik nach 1945," in Hans Henning Hahn, ed., *Hundert Jahre sudeten-deutsche Geschichte: eine völkische Bewegung in drei Staaten* (Frankfurt am Main: Lang, 2007), pp. 287-288.

(26) Hahnová, *Sudetoněmecký problem* (前注3参照), p. 98.

には自由意思で加入を望む者すべてに加入を認めた⁽²⁷⁾。これによって、チェコ出身のドイツ人とその関係者は、出身地域にかかわらず「ズデーテン・ドイツ人」とされた。しかし、上述の社会背景から、チェコ側から追放されたすべての「ズデーテン・ドイツ人」が、等しく郷人会に組織されたわけではなかった。中でも、前章でみた「チェシン地域(東シレジア)」出身者は、1938年のミュンヘン協定でポーランドによって同地が占領されたため、ドイツが併合した「帝国管区ズデーテンラント(Reichsgau Sudetenland)」とは、行政的にも異なる位置づけであった。「チェシン地域」は、国境沿いの地域でありながら、ズデーテン管区には組み入れられず、他の「ズデーテン・ドイツ人」とは異なる歴史を経験した地域であった。にもかかわらず、第二次世界大戦後は、チェコスロヴァキア及びポーランドからのドイツ人追放政策に従って、他のドイツ人地域と同様、当地のドイツ人はドイツやオーストリアなどへ追放されたため、当地出身のドイツ系住民も、「ズデーテン・ドイツ人」の一部として扱われることが多かった。

「チェシン地域」出身のドイツ系被追放民は、戦後ポーランド領となったビェルスコ＝ビャワ／ビーリッツ＝ビアラ(Bielsko=Biała)地区⁽²⁸⁾からのドイツ系被追放民と協同で、独自の故郷団体を設立することになった。この地域出身のドイツ系被追放民は第二次世界大戦後、故郷団体「ベスキーデンラント」を設立し、チェコスロヴァキアとポーランドの国境を越えた「ベスキーデン地方」という概念を全面に打ち出していくことになる。

2.2 組織活動の始まり

これに対し、「ベスキーデン地方」から追放されたドイツ人は9,602人を数えたが、このうち8,962人がドイツ連邦共和国に送られた(表3参照)⁽²⁹⁾。彼らの追放先は、ミュンヘン、ニュルンベルクなどドイツの南部から、ベルリンなど広範囲にわたっていた。また、ドイツ連邦共和国以外ではオーストリアへの追放が多数を占めていた。彼ら被追放民は、オーストラヴァやビェルスコ＝ビャワなど個々の都市出身者の身元確認情報を集めるために、出身地別の機関誌を発行していた。

1950年代に入ると、都市の枠を超えて、「ベスキーデン地方」全体のドイツ人を統合する動きが現れるようになった。その背景には、連邦共和国政府によるドイツ人統合政策の開始に伴い、「ベスキーデン地方」出身のドイツ人が、他の「ズデーテン・ドイツ人」組織との差別化を図る必要に迫られたことがあった。その中でも、ベルリンを発行元とし、オーストラヴァを中心とする地域の情報誌であった『オストラウ・カルヴィナー故郷新聞(Ostrau-Karwiner Heimatpost)』は、1952年に『ベスキーデン・ポスト(Beskiden Post)』と改称し、「ベ

(27) *Ibid.*, pp. 114-115.

(28) ビャワ川を挟んで併存していた、左岸(シレジア領)のビェルスコ市と右岸(ガリツィア領)のビャワ市は、第二次世界大戦後に統合され、ビェルスコ＝ビャワ市と改称した。

(29) Alfred Bohmann, *Bevölkerung und Nationalitäten in der Tschechoslowakei* (Köln: Verlag Wissenschaft und Politik, 1975), p. 475.

表3 オストラヴァとカルヴィナーから追放されたドイツ人数

日付	総数	出発地	到着地
1946.4.18	1,200	オストラヴァ	アウクスブルク
1946.6.1	1,201	オストラヴァ	ダッハウ
1946.6.11	1,219	カルヴィナー	ミュンヘン
1946.6.17	1,215	オストラヴァ	シュヴァビッシュ・グミュンド
1946.7.11	1,215	カルヴィナー	アウクスブルク
1946.7.13	1,205	オストラヴァ	ハイデルベルク
1946.8.20	1,208	オストラヴァ	ハイデンハイム
1946.9.2	1,199	オストラヴァ	ウルム
1946.9.19	1,225	カルヴィナー	シュヴァバハ
1946.10.23	1,197	オストラヴァ	シュヴァインフルト

出典：Beskiden Post 11, no. 11-12 (1960), p. 2.

スキーデン地方」全域の住民糾合を目指すようになった。

この背景には、地域的・社会的背景の異なる被追放民をひとまとめに「被追放民」として扱う連邦政府への不信があった。1952年5月末、連邦政府の被追放者省は、被追放民の故郷の情報を収集する諮問会議を開催し、被追放民の補償額の査定に着手していた。この結果、ポーランド領ビエルスコとチェシンの出身者に対する補償額は、カトヴィツェ地区出身者への補償額の基準に従うことになった。チェコスロヴァキア領のオストラヴァとフリーデクからの被追放民に対する補償額は、「ズデーテン・ドイツ人」への補償額の基準に従うこととされた。このように、「ベスキーデン地方」の被追放民は、「ズデーテンラント」などの郷人会に従属する存在として連邦政府からは処理された⁽³⁰⁾。

このような連邦政府の決定に対して、「ベスキーデン地方」の被追放民は激しい反対を示した。以下、同年6月の『ベスキーデン・ポスト』誌の記述から引用する。

我々の故郷であるベスキーデン地方がズデーテンラントなどの郷人会に組み込まれることは嘆かわしい。故郷ベスキーデン地方の財産・情報はこれらの郷人会のメンバーに占有されている。連邦政府の計画が実施されるなら、故郷団体ベスキーデンラントはお払い箱になってしまう。しかし、テシェン[チェシン]やフリーデク、オストラウ[オストラヴァ]の豊かな工業力を持つ我々ベスキート・ドイツ人の生活水準は、[ポーランド領]ブレスラウやカトヴィツ、ラチボル[ラチブシュ]、ズデーテン地方のライヘンベルク[リベッツ]、ヤーゲルンズドルフ[クルノフ]のドイツ人よりも高い。わが故郷ベスキーデン地方のドイツ人の90%が知識人層を構成しており、我々の経済力はズデーテンや旧帝国、上シュレージエンのドイツ

(30) Beskiden Post 3, no. 6 (1952), pp. 3-6.

人よりも高い。したがって、連邦政府は、ベスキーデン地方の財産を査定すべきではない。我々が失った財産を査定するのは、わが故郷の出身者だけであるはず。[……]ズデーテンの郷人会と我々を一緒に扱うような査定は不十分である。ベスキート・ドイツ人の補償額確定は我々が自身の手で行うべきことを、ボンの連邦政府に示さなければならない⁽³¹⁾。

同誌は続けて、「ベスキート・ドイツ人」の代表委員をボン連邦政府に派遣する旅費を賄うために、数多くの「ベスキート・ドイツ人」の支援が必要であると訴えた。以上の記述からもわかるように、「ベスキーデン地方」は工業地帯であり、ほかの「ズデーテン・ドイツ人」の基準で補償額が査定されるべきではないという見解が現れていた。

このように、1950年代初頭にはドイツ連邦共和国各地の「ベスキート・ドイツ人」団体による団体設立が相次いだ。ニュルンベルクでは、1951年にチェシン出身の指導者マハチェク(Franz Machatschek)の主導で「故郷グループ・ベスキーデンラント(Heimatgruppe Beskidenland)」の設立が呼び掛けられ、1954年から同地で機関誌『ベスキーデン・カレンダー(Beskiden Kalender)』の発行が開始された。さらにマハチェクは、1954年10月にミュンヘンで「ベスキーデン地方」出身のドイツ人12名を集め、「故郷団体ベスキーデンラント(Heimatbund Beskidenland: 以下、ベスキーデンラント)」を設立した。同団体は翌年に執行部を選出し、「ベスキート・ドイツ人」の中心的組織として活動を開始した。1958年には、新しい機関誌『我がベスキーデン地方』の発行を開始した。同誌は創刊号において、オーデル／オドラ(Oder/Odra)川からヴァイクセル／ヴィスワ(Weichsel/Wisła)川までの「全てのベスキート・ドイツ人のための故郷新聞であり、利害関係のみに基づく新聞ではない。我々の課題は、暴力的に損なわれた文化世界を再発見し、『ベスキーデン地方』の工業地帯におけるドイツ性を残すことである」⁽³²⁾と述べ、「ベスキート・ドイツ人」統合の必要性を訴えた。

創刊当時の『我がベスキーデン地方』購読者の出身者比率は、チェシン、カルヴィナー及びフリーシュタート出身者が28%、オストラヴァ及びヴィートコヴィツェ(Ostrava, Vítkovice)ならびにボフミーン及びフルショフ(Bohumín, Hrušov)出身者が27%、フリーデク＝ミーステク(Frýdek-Místek)⁽³³⁾出身者15%、トゥシネツ及びヤブルンコフ(Třinec, Jablunkov)出身者が11%、ノヴィー・イチーン(Nový Jičín)出身者が3%であった。加えて、ビェルスコ＝ビャワやジヴィエツ(Żywiec)などポーランド領出身者も19%を占めていた⁽³⁴⁾。『ベスキーデン・カレンダー』誌は、『我がベスキーデン地方』の発刊後も、故郷団体「ベスキーデンラント」がニュルンベルクで発行を引き継いだ。他方、ベルリン発行の『ベスキ

(31) *Ibid.*

(32) *Mein Beskidenland* 1, no. 1/2 (1958), p. 2, no. 3/4 (1958), p. 1.

(33) 同市は第二次世界大戦以前、オストラヴィツァ川を挟んで右岸(モラヴィア領)にミーステク市、左岸(シレジア領)にフリーデク市が併存していたが、第二次世界大戦中に統合され、フリーデク＝ミーステク市と改称した。

(34) *Mein Beskidenland* 1, no. 3/4 (1958), p. 1.

ーデン・ポスト』誌は、発行人のグルーダ(Anton Gruda)が故郷団体「ベスキーデンラント」に移籍したことで、「ベスキーデンラント」には統合されない民間組織として位置づけられた。もっとも、執筆者はこれらの機関誌に横断的に投稿しており、「ベスキート・ドイツ人」同士の関係は継続された⁽³⁵⁾。

故郷団体「ベスキーデンラント」は、ミュンヘン、アウクスブルク、レーゲンスブルク、ニュルンベルク、エアランゲン、ヴュルツブルクなどバイエルン州を中心に、ボーフム、カールスルーエ、ケルン、シュトゥットガルトなど連邦共和国各地に支部を設けた。また、ベスキート・ドイツ人の大会が、1957年にフォルフハイム、1959年にルードヴィヒスブルク、1961年にニュルンベルク、1963年にカールスルーエ、1965年にミュンヘン、1967年にボーフム、1969年にシュトゥットガルト、1971年にミュンヘンで開かれた⁽³⁶⁾。故郷団体「ベスキーデンラント」は、設立の経緯から、チェコ(ボヘミア、モラヴィア、シレジア)出身のドイツ人を包括する「ズデーテン・ドイツ人郷人会」から自立して運営されており、郷人会の大会に参加したのは、1956年の大会が最初であった。郷人会の大会は、チェコ全土のドイツ系団体が参加することによって催されたため、故郷団体「ベスキーデンラント」は、その後も定期的に郷人会の大会に代表を送り続けた⁽³⁷⁾。

3. 第二次世界大戦後に引き継がれた「ベスキート・ドイツ人」の歴史・地域認識

3.1 由来としての「ベスキート協会」

これまで見たように、「ベスキート・ドイツ人」たちは自らの故郷を「ベスキーデン地方」と呼び表したが、それでは、「ベスキーデン地方」とはどのような地域として設定されたのであろうか。

その手がかりとなるのが、19世紀末から両大戦間期にかけて同地で活動していたツーリスト団体「ベスキート協会(Beskidenverein)」である。第二次世界大戦後、故郷団体「ベスキーデンラント」はベスキート協会について、「人類の自然保護、民族融和のツーリスト活動とともに、ドイツ人の民族活動を行うことでドイツ人の故郷の資産を守り、故郷との結びつきを満たす」と強調して、ベスキーデン山脈のドイツ系住民にとっての重要性を強調したと指摘した⁽³⁸⁾。帝政期のベスキート協会の活動に関しては、ペルツ(Martin Pelc)及びダニェク(Radoslav Daněk)の先行研究にまとめられているので、まずは概観しておく⁽³⁹⁾。

(35) *Mein Beskidenland* 1, no. 1/2 (1958), p. 2.

(36) *Mein Beskidenland* 17, no. 11 (1974), pp. 1-2.

(37) 1956年大会時には、チェコから14のドイツ系団体が参加した。*Beskiden Post* 6, no. 4 (1956), pp. 4-5.

(38) *Beskiden Kalender* 9 (1963), pp. 71-77; *Mein Beskidenland* 6, no. 2 (1963), pp. 1-2; *Beskiden Post* 24, no. 6 (1973), pp. 1-5.

(39) Martin Pelc, “Německý horský spolek Beskidenverein,” *Těšinsko* 47, no. 3 (2004), pp. 8-20; Radoslav Daněk, “Beskydské turistické spolky v Moravské Ostravě a jejich činnost v letech 1893-1938,” *Ostrava: Příspěvky k dějinám a současnosti Ostravy a Ostravska* 19 (1999), pp. 218-239. ただし、ベスキート協会と戦後の故郷団体の関係については、先行研究においても触れられていない。

「ベスキーデン地方」の由来となったベスキーデン山脈については序論で記したが、ベスキーデン山脈が観光資源として、何より政治的な資源としての意味を持つようになった契機は、19世紀のハプスブルク帝国に広まったツーリスト・自然保護協会の設立ブームである⁽⁴⁰⁾。オーストリアのアルペン協会を模範としたツーリスト団体は、19世紀後半にはズデーテン山地に及び、ベスキーデン山脈近郊のドイツ系住民も、1880年代に入るとツーリスト団体設立に着手した。こうした経緯から、オストラヴァとその近郊のフリーデク市のドイツ系市民層が中心となって1893年に設立されたのが、ツーリスト団体「ベスキート協会」であった。同協会は、ドイツ系住民がベスキートの名を冠した初の本格的な結社であった。

ベスキート協会設立のイニシアチヴをとったのは、北モラヴィアの工業地帯オストラヴァとフリーデクのドイツ系市民層であった。ベスキート協会は同地域のドイツ系住民、とりわけ教師や官吏などの都市市民層を対象に、主にベスキーデン山脈への遠足やスキーなどの行楽活動を組織した。ツーリスト団体は当時のチェコ系やポーランド系によっても設立されるようになり、19世紀末の北モラヴィア・シレジアでは、協会の活動範囲の確保と会員獲得をめぐる、各協会が対抗関係にあった⁽⁴¹⁾。そうした活動のために重要な役割を担ったのが、各協会が各地の山頂に建設した山小屋や登山道の整備であった。ベスキート協会が建設した山小屋には、ドイツ語のみの表示しか掲げられておらず、チェコ人利用者からの反発を招いた⁽⁴²⁾。

ベスキート協会は、ビーリッツやボフミーンなど、北モラヴィア・シレジア全域に支部を設置したほか、ドイツ系住民の会員確保のために、ハプスブルク帝国領を越えて、カトヴィツェやラチボル(Ratibor/Racibórz)などドイツ領上シレジアの諸都市にも支部を設置した。こうした活動において特に大きな役割を果たしたのが、大工業の経営者層やドイツ系議員など地元の有力者からの支援であった。ベスキート協会は、同地に広大な所領を持ち、ハプスブルク帝国皇帝の親戚にあたるチェシン大公アルブレヒトとの協力関係を取り付けたことで、広範な活動が可能となった。この結果、1893年の発足時に1,534人であった会員数は、1909年には4,618人を数え、1895年から1909年までの間に、ベスキート協会のツーリズムに参加した者の数は、244,275人にのぼった(表4参照)⁽⁴³⁾。第一次世界大戦後、ベスキート協会はチェコスロヴァキア側とポーランド側に分断され、組織の再編を余儀な

(40) 19世紀中央ヨーロッパにおいて自然保護協会が政治化する過程については、下記の研究を参照。古川高子『『寛容と排除』の自然保護活動：二十世紀初頭オーストリア社会民主党『自然の友』協会の活動から』立石博高、篠原琢編『国民国家と市民：包摂と排除の諸相』山川出版社、2009年、189-215頁。

(41) チェコ系住民は1880年代に「ベスキート山岳協会ラドホシュチ(Beskýdská Pohorská jednota Radhošť)」を、ポーランド系は1910年に「ポーランド・ベスキート・ツーリスト協会(Polskie Towarzystwo Turystyczne Beskid)」を設立した。Radoslav Daněk, “Turistické chaty a útulny v Beskydech před rokem 1938,” *Ostrava: Příspěvky k dějinám a současnosti Ostravy a Ostravska* 20 (2001), pp. 211-241.

(42) Pelc, “Německý horský spolek Beskidenverein” (前注39参照), p. 14.

(43) *Mitteilungen des Beskiden-Vereines* 1910, no. 3, pp. 41-44.

くされた。両国に分離したベスキー協会は、戦間期にも山小屋建設などの活動を継続したが、ドイツ侵攻後の1939年9月には、ベスキー協会は帝国管区ズデーテンラントの官制ツーリスト協会へと統合された。チェコスロヴァキア領内の同協会は、第二次世界大戦終結後の1945年6月20日の同国内務省布告で解散した⁽⁴⁴⁾。

ベスキーデン山脈を活動拠点とするツーリスト団体は複数存在していたが、帝政期における活動領域とその規模、有力者層との結びつきという点で、ドイツ系のベスキー協会は群を抜く存在であった。ベスキー協会と戦後の故郷団体「ベスキーデンラント」との人的結合は定かではないが、両者の関係の深さは、故郷団体の機関紙が同協会について度々触れていることから明らかである⁽⁴⁵⁾。

3.2 地域の一体性

次に、「ベスキー地方」の一体性がどのように、故郷団体によって形成されたのかを見ていきたい。その手掛かりとなるのが、1950年代初頭の「ベスキー・ドイツ人」の指導者のひとりであったグルーダの記述である。彼は、50年代初頭に創刊された機関誌『ベスキ

表4 ベスキー協会の会員数(1893-1909年)

支部名	1893	1901	1909
ビーリッツ＝ビアラ	432	913	1,205
チェシン	429	481	552
ヴィートコヴィッツ	190	195	514
オストラヴァ	148	286	498
フリーデク	146	249	260
ミーステク	97	92	128
フリードラント	52	30	74
ノヴィー・イチーン	40	61	94
ラチブシュ		350	320
カトヴィツェ		194	252
ビーロヴェツ		49	38
ビトム			468
ミスロヴィツェ			123
ボフミーン			92
合計	1,534	2,385	4,618

出典：Zemský archiv Opava, Inventární číslo 23, karton 11 より作成。

(44) Pelc, “Německý horský spolek Beskidenverein” (前注39参照), p. 19.

(45) “Gründung des Beskidenvereins,” *Mein Beskidenland* 6, no. 2 (1963), pp. 1-2; “Gründung des Beskidenvereines,” *Beskiden Kalender* 9 (1963), pp. 71-72.

ーデン・ポスト』及び『ベスキーデン・カレンダー』の編集者を務め、「ベスキーデン地方」の歴史記述を積極的に行った。これらの媒体に掲載された記事は、1955年に発表された彼の主著『オーデル川とヴァイクセル水源の間に広がる故郷：文章と写真や絵で見るベスキーートと隣人たち』にまとめられている⁽⁴⁶⁾。

グルーダによれば、ベスキーートと呼ばれる空間は、何よりも地理的に閉じられた地域である。東と西はヴァイクセル川とオーデル川を境界とし、南は西ベスキーデン山脈によって区切られ、同時に欧州の分水嶺を形成する。北はオルザ川とヴァイクセル川で区切られる。いわば、山脈から丘陵地を経て北へと降りてゆく形である。ポーランド領ガリツィアと接する地域が東部(ビェルスコ＝ビャワ)を構成し、オストラヴィツァ川(モラヴィア・オストラヴァとシレジア・オストラヴァ、フリーデクとミーステクが分かれる)でチェコのモラヴィアと接する西部となる(図1参照)⁽⁴⁷⁾。行政的にはオストラヴィツァ川の西側に位置するオストラヴァ(モラヴィア・オストラヴァ)、及び同川西岸のミーステク市はチェコのモラヴィア領であり、ビャワ川東岸のビャワ市はガリツィアに属していた。「ベスキーデン地方」は、行政的にはオーストリア・シレジアの東部四郡庁(オーストリア・シレジア)の域外の都市も含む概念であった⁽⁴⁸⁾。

故郷団体は、「ベスキーデンラント」の地域的一体性を視覚的にも訴えた。彼らの「ベスキーデンラント」に対する地域観は、1962年に掲載された記事「スフィンクスのベスキーデン地方」に現れていた(図2参照)。

チェシンが心臓部となり、同市が東シレジアの首都であったことが強調される。チェシンは精神的な中心地であり、学園都市でもある「オルザ河岸のアテネ」とされる。頭脳の位置には、チェコ領のオストラヴァとヴィートコヴィツェが当てはまる。隣接するボフミンは、鉄道交通の要衝として重要な位置を占める。オルロヴァー(Orlová)からカルヴィナーを通じてフリーシュタートには、帝国屈指の炭鉱地域が広がる。ポーランド領ビェルスコは目の位置にあり、その目は東に向いているが、後方も見ている。鼻の位置は、ビール製造で知られるジヴィェツ、口から喉にかけて、ヴァイクセル川沿いのスコチュフ市(Skoczów)とウストロン市(Ustroń)が位置する。これらの地域は、ベスキーデン地方の気管支に例えられる。ここでは病人と休養が必要な人が新たな英気を養い、湿地で入浴できる。ここで気管が肺葉に分かれる。右がベルゲン(Bergen)、左がヴァイクセルとなる。オルザ川沿いのヤブルンコフ市、オストラヴィツァ川沿いのフリードラント(Frýdlant nad Ostravicí)は、両者ともベスキーートの腎臓である。オストラヴァの下方に広がるラドヴァニツェ(Radwanitz/ Radvanice)、フルショフ、ラジ(Lazy)などを中心とする地域は大きな肝臓であり、ベスキーデン地方の実験室

(46) Gruda, *Heimat zwischen Oder- und Weichselquellen* (前注1参照)。

(47) *Ibid.*, pp. 8, 15.

(48) オストラヴァ市はオストラヴィツァ川(Ostravica)を挟んで、モラヴィア・オストラヴァとシレジア・オストラヴァに分かれていたが、戦間期に統合された。

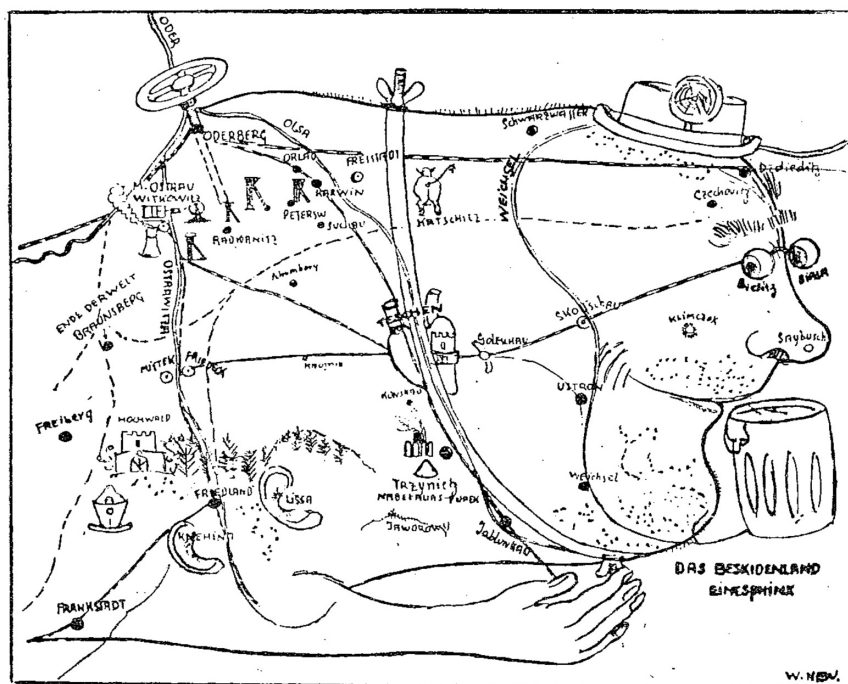


図2 「スフィンクス」のベスキーデン地方
出典：Mein Beskidenland 5, no. 4 (1962), p. 1.

である。フリーデク、ミーステクは感情を制御する場所であり、健全な神経システムにとって重要である⁽⁴⁹⁾。

工業都市としてのオストラヴァ、カルヴィナー及びオストラヴァに近いフリーデクから、1920年の協定によって分割されたチェシン、ポーランド側のビェルスコに至る、多言語・多宗派という歴史的経緯をもつこれらの地域が「ベスキーデン地方」として、その住民が「ベスキート・ドイツ人」として描かれた背景には、故地から追放されたことによる、故郷のシンボル化が大きな役割を果たした。「ベスキーデン地方」という概念が、追放されたドイツ系住民のみによって用いられたことから、実体としての地域というよりもむしろ、故郷を離れたドイツ系住民を結びつける機能を果たしていたといえよう。

こうした経緯は、被追放民団体の代表格である「ズデーテン・ドイツ人」と彼らの地域概念「ズデーテンラント」と共通していた。ハーノヴァー (Eva Hahnová) によれば、「ズデーテン・ドイツ人国民集団と『自分たち』の歴史は第二次世界大戦後の10年間で形成されたため、集団的ナショナル・アイデンティティの源としての歴史像を活用した」⁽⁵⁰⁾ のであった。故

(49) Mein Beskidenland 5, no. 4 (1962), pp. 1-2.

(50) 他方、「ズデーテン・ドイツ人」が国民集団となった時期は第一次世界大戦直後にさかのぼるという見解もある。Hahnová, *Sudetenněmecký problem* (前注3参照), p. 113.

郷団体「ベスキーデンラント」の設立背景や、同団体の機関誌の言説からも、両者の共通点は数多く指摘できる。

このように故郷団体「ベスキーデンラント」は、地域設定の根拠として、以上のような地理的・歴史的背景をあげ、「ベスキーデン地方」が有機的に一体化した地域であることを強調した。「ベスキーデン地方」とは、行政的には存在しない地域概念であったが、チェシン公国、ハプスブルク期のオーストリア・シレジア邦を根拠に、歴史的に一体性を有する地域であることを強調したのである。

3.3 「多言語・多宗派共存」の称揚とその陥穽

「ベスキート・ドイツ人」の地域・歴史認識は、前述した「ズデーテン・ドイツ人」団体の歴史観との相違点を比較することによって明確になる。ズデーテン・ドイツ人郷人会は1950年の創設時に、失った家屋財産の法的要求及びそれに伴う「民族自決権」の実現を目標に定めていた。郷人会は、第一次世界大戦終結時に米ウィルソン大統領によって提唱された「民族自決権」に基づいて、チェコ国境地帯のドイツ系住民が「ズデーテンラント」としてチェコスロヴァキアからの分離要求を起こしたことを引き合いに出した。この権利の有効性に訴えることで郷人会は、出自や宗派、党派、社会階級の別なく、故郷を取り戻すことを共通の目標とする運命共同体「ズデーテン・ドイツ人」のために、あらゆる政治力を投入することで故郷帰還のための権利を勝ち取ることを目指した⁽⁵¹⁾。1965年の郷人会大会では、「ズデーテン・ドイツ人」に対する補償要求及び故郷への帰還権の実現が改めて要求されると同時に、ドイツ人の権利を認めることがヨーロッパ統合に寄与するという見解が示された。郷人会は、表立った民族対立史観やチェコ人に対する「報復」を否定する一方で、この「故郷」回復のプログラムこそが、ドイツ人の国民的統一と自由と人権に基づく統合ヨーロッパに寄与するものであると主張した⁽⁵²⁾。

故郷団体「ベスキーデンラント」の地域・歴史認識は、「運命共同体」としてのドイツ国民統一よりもむしろ、「ベスキーデン地方」の一体性を強調するものであった。『我がベスキーデン地方』誌は、「スラヴの隣人についての過去に取り組むことは、未来の手掛かりとなる。イデオロギーや宗派から自由にならなければならない。歴史の真実から目をそらし、百年にわたる経験を見捨てることは、何の役にも立たない」⁽⁵³⁾という主張を行った。「ベスキート・ドイツ人」側の主張では、ドイツ人のナショナリズムが背景に退き、ゲルマンとスラヴの「民族共存」の歴史が強調された⁽⁵⁴⁾。1950年代に「ベスキート・ドイツ人」の歴史観

(51) Nittner, *Dokumente zur sudetendeutschen Frage* (前注24参照), pp. 350-353; Weger, “Die Volksgruppe im Exil?” (前注25参照), p. 297.

(52) Nittner, *Dokumente zur sudetendeutschen Frage* (前注24参照), pp. 440, 509-510.

(53) *Mein Beskidenland* 1, no. 3/4 (1958), p. 1.

(54) Gruda, *Heimat zwischen Oder- und Weichselquellen* (前注1参照), p. 6.

を描いたフセク (Erich Fussek) の見解によれば、「ベスキーデン地方」は、小さな空間の中に多言語・多宗派が共存する「小オーストリア」であり、広いヨーロッパの中でも類を見ない存在とされる。さらに、寛容の精神を持つハプスブルク帝国治下の体制が、多言語・多宗派のための最良の体制と捉えられた⁽⁵⁵⁾。

このような、帝政期の体制を理想視する見解が現れた背景には、第二次世界大戦前「ズデーテン地方」のドイツ系住民がチェコ人に対して多数派・支配的地位を占めていたことに対し、「ベスキート・ドイツ人」は帝政期より地元スラヴ系住民と協同関係を構築していたという認識があげられる。「ベスキート・ドイツ人」の主張によれば、ドイツ都市であったチェシンでは、ポーランド系民族運動は外部からもたらされたものであり、地元シレジア住民はポーランド人のショーヴィニズムには与せず、ドイツ人と協同する存在とされた。1910年から1930年にかけて、オストラヴァではドイツ人の数が24,871人、51%も減少したほか、フリーデクとミーステクでも5,717人、58%も減少した⁽⁵⁶⁾。このことは、チェコスロヴァキアとポーランドの独立及びチェシン分割の結果、長年の多言語・多宗派共存がスラヴ人の民族活動によって壊されたという考えに帰着する⁽⁵⁷⁾。もっとも、戦間期におけるドイツ人の減少については、帝政期には民族(národnost)帰属を問う統計は存在せず、あくまでも言語に基づく「ドイツ語話者」が明記されたにすぎなかったことを考慮に入れなければならない。このため、帝政期には、ドイツ語話者として登録していた地元シレジア住民が、戦間期に「チェコスロヴァキア民族」あるいは「ポーランド民族」として登録したと考えられる⁽⁵⁸⁾。このように、「ベスキーデン地方」における「ドイツ人性」は決して自明のものではなかった。さらに「ズデーテン地方」と異なり、1920年の時点で領土が分割された経験を持つ「ベスキーデン地方」においては、帝国時代の地域的一体性の喪失を嘆く声が、帝政期の多言語・多宗派共存への郷愁と結びついて発せられた。

しかし、故郷団体「ベスキーデンラント」が述べたような「多言語・多宗派共存」の歴史を、額面通りに受け取るには注意が必要である。第1章で述べた東方研究の歴史観は、ズデーテン・ドイツ人郷人会はもとより、第二次世界大戦後の「ベスキーデン地方」にも及び続けた。東方ドイツ人の言語島を専門とし、1930年代後半に東方研究の中心であったブレスラウ大学に招聘されたビーリッツ(ビェルスコ)出身の民俗学者クーン(Walter Kuhn)は⁽⁵⁹⁾、第

(55) Erich Fussek, “Das Olsaland: Prüffeld europäischer Gesinnung,” *Stifterjahrbuch* 3 (1953), pp. 26-39.

(56) *Beskidens Post* 9, no. 11 (1958), p. 1. 後にズデーテン管区に編入されることになるシレジア西部では、1930年においてもドイツ人は233,859人、全住民の60.8%に達しており、地方では90%を超える自治体も少なかった。Marie Gawrecká, *Němci ve Slezsku 1918-1938* (Opava: Slezská Univerzita, 2002), pp. 18-22.

(57) *Beskidens Post* 1, no. 6 (1950), pp. 7-9; *Beskidens Post* 7, no. 11 (1956), pp. 1-2.

(58) *Beskidens Kalender* 5 (1959), pp. 101-103. チェコ側チェシンの総人口は、1911年の286,704人に対して、1921年には272,972人と大きく変わっていない。Mečislav Borák, ed., *Nástin dějin těšínska* (Ostrava: Advertis, 1992), p. 249.

(59) クーンの生涯と業績については、以下を参照。Alexander Pinwinkler, “Walter Kuhn (1903-1983) und der Bielitzer ‘Wandervogel e. V.’: Historisch-volkskundliche ‘Sprachinselforschung’ zwischen völkischem Pathos und politischer Indienstnahme,” *Zeitschrift für Volkskunde* 105 (2009), pp. 29-52.

二次世界大戦後もハンブルク大学で精力的に研究を続け、東方ドイツ人「言語島」研究の第一人者的存在となった。クーンは1930年代以来、スラヴ系の「地元シレジア住民」を、ドイツ語を話すドイツ文化の担い手として位置付け、当該地域が歴史的にドイツ地域であることを立証しようとした⁽⁶⁰⁾。こうした歴史を叙述するにあたってクーンが重要視したのは、同地域におけるプロテスタント(ルター派)の影響力であった。宗教改革によってプロテスタントを受け入れたビーリッツは、ハプスブルク帝国の統治下に入った後も、帝国内では例外的にプロテスタントの比率が高い地域として知られた。彼は、プロテスタントの展開を通してドイツ人がビーリッツやチェシンの歴史に果たした役割、プロテスタントを介したバスキート地方とウィーンとの結びつきを強調した⁽⁶¹⁾。ビーリッツ出身不明者や故郷の情報集めを目的に第二次世界大戦直後に発行された『プロテスタント回状(Evangelische Rundbrief)』誌上でクーンは、同地における東方植民の伝統とドイツ系プロテスタントを結びつけ、ドイツ人地域がカトリックのポーランド人によって浸食されているという見解を示した⁽⁶²⁾。クーンらのプロテスタント研究もまた、第二次世界大戦前の「東方研究」の思想を継承するものであった。

故郷団体「バスキーデンラント」は、中世のドイツ植民に端を発する「東方研究」史観を表明していた⁽⁶³⁾。「ズデーテン・ドイツ人」研究機関の「ドイツ・folk史観」と、「バスキート・ドイツ人」の親ハプスブルク帝国史観は、「多言語・多宗派共存」への力点の違いは見られたが、中央ヨーロッパをドイツ性の優位を前提とした地域と捉えていたという意味で共通していた⁽⁶⁴⁾。

結論

以上、本稿では故郷団体「バスキーデンラント」をはじめとする、第二次世界大戦後「バスキート・ドイツ人」の出版物を分析することによって、「バスキーデン地方」という地域概念がどのように形成・政治化されたのか、地域住民にとってどのような意味を有していたのかを考察した。

同地域では1920年に同地域が分割された後、国際的な場においてこの地域の問題を訴えるために、「チェシン地域」概念も戦略的に用いられてきた。地域の範囲は、どの名称においてもほぼ同じ範囲を示していたが、その呼称は、それをを用いる主体によって使い分けら

(60) Walter Kuhn, "Die Schlonsaken und ihre Sprache," *Schlesisches Jahrbuch* 7 (1935), pp. 57-62.

(61) 言語島ビーリッツの歴史についてのクーンの研究は、以下の文献において結実した。Walter Kuhn, *Geschichte der deutschen Sprachinsel Bielitz Schlesien* (Würzburg: Holzner, 1981).

(62) *Bielitzer evangelischer Rundbrief* 27 (1958), pp. 3-8.

(63) Gruda, *Heimat zwischen Oder- und Weichselquellen* (前注1参照), p. 75; *Beskiden Post* 7, no. 11 (1956), pp. 1-2.

(64) ただし「ズデーテン・ドイツ人」内部にも、カトリック組織「アッカーマン・ゲマインデ」や旧ドイツ人社会民主党のように、チェコ人との共存と相互理解を訴えるグループが存在していたことも付け加えたい。Eva Hahnová and Hans Henning Hahn, *Sudetoněmecká vzpomínání a zapominání* (Praha: Votobia, 2002), pp. 159-161.

れてきた。第二次世界大戦後に本格的に使用されることになった「ベスキーデン地方」という名称の由来は確かに地理的なものだが、地理的で「客観的」と目される概念から政治的な意味を持つ概念へと変容したと捉えるよりは、政治的な目的のために、「客観的」指標が援用されたと考えるべきであろう⁽⁶⁵⁾。

「ベスキート・ドイツ人」たちは第二次世界大戦後、移送された地において自らの故郷団体を設立し、失われた故郷への郷愁を訴えるという点で、他のドイツ系被追放民と同じ戦略を共有していた。その一方で、故郷団体「ベスキーデンラント」は、「ベスキート・ドイツ人」被追放民の情報収集・補償問題を有利に進めるために、「ズデーテン・ドイツ人」の故郷団体との分離・差異化を図った。「ベスキート・ドイツ人」たちが主張した、「ズデーテン・ドイツ人」との相違点は、両者における歴史的背景の違い、とりわけ、ベスキーデン地方における長年にわたるスラヴ系住民との多言語・多宗派共存の歴史を訴えるものであった。このような、ドイツ文化の優位と正当性に基づく多言語・多宗派共存史観は、ビーリッツ出身のクーンらに代表されるような「東方研究」によって理論化されていた。「ベスキート・ドイツ人」がしばしば強調した「多言語・多宗派共存」「共存する市民(Mitbürger)」という概念は、当地における中世以来のドイツ文化の優位という前提に基づくものであったことには留意しなければならない。

その一方で、「ベスキーデン地方」におけるドイツ人とスラヴ系住民との関係は、一義的な支配・被支配の関係に収まるものではなかった。クーンらはドイツ語住民を主体としながらも、「ベスキーデン地方」におけるプロテスタント教会の活動を社会生活の側面から積極的に評価した。特に、ビーリッツやチェシンではプロテスタント教会が孤児院やシスター育成施設、教員養成施設などを数多く設立し、地域住民の福祉に寄与したこと、これらの施設ではカトリック信徒も受け入れられるなど、宗派や言語を超えた地域住民への社会活動が営まれたことが強調された⁽⁶⁶⁾。本稿では十分に扱えなかったが、民族を超えた宗派的なつながりを地域の中で維持しようとする試みもまた見られたのである。

本稿では、「ベスキート・ドイツ人」が生み出した地域概念とその歴史的背景を中心に扱ったため、他の言語・宗派の地域社会については、十分に取り上げることができなかった。ドイツ側からの観点だけでなく、当該地域に根差した現地のチェコ語・ポーランド語住民からの視点が今後の課題となる。

(65) このような地域概念の捉え方は、「ベスキーデン地方」のみならず、「ズデーテン」など他の境界地域の分析においても指摘されている。篠原「中央ヨーロッパの歴史とは何か」(前注19参照)、322頁。

(66) *Bielitzer evangelischer Rundbrief* 31 (1962), pp. 5-6.